

の畫風を慕ひ、別に一家を成したる故鶴田機水氏の爲めに、氏の知友たりし知名諸氏數十名相謀り、五月十六日より二十日まで、上野公園松坂屋吳服店に於て、故人の遺墨展覽會を開き、猶追善畫會を開きて、知名畫家の畫幅百餘點を陳列して即賣に附し、其収入は總て遺族に贈呈する筈なり。

大正五年十二月には『鶴田機水遺墨帖』（松浦一編集発行）が発行された。

⑦ 神木（森井）健介起用

大正三年六月二日、大沢三之助（同年八月十二日宮内技師に転任）の後任として神木健介が教授に任命された。神木は旧姓森井。神木と改姓し（大正二年）、再び森井姓に戻った（同十二年）。彼は明治四十四年東京帝国大学工科大学建築科を卒業し、大正二年欧米留学。翌三年六月帰国し、本校に起用され、昭和十九年に退官するまで本校建築科の教育に尽力した。

⑧ 小万柳堂鑑藏書畫展覽會

本展覽會については年報もこれに触れているが（前頁）、『東京美術学校校友会月報』第十三卷第三号には非常に詳しい記事があるので左に抜粋する。

小萬柳堂鑑藏書畫展覽會

去る六月六日及び七日の兩日、本校文庫を會場として、支那の藏

幅家廉泉氏所藏書畫の展覽會を開きたり。廉泉氏は上海に近き江蘇省常州無錫の人にして、曾て江蘇舉人として中央政府の官吏となり、陞りて位二品官度支部郎中に至りしが、歳不惑に達すると共に、掛冠して故山に退耕し、専ら思を刊書著作藝術に潛めらる。別業を小萬柳堂と號し、鑒藏の古書畫悉く之れに收藏せりといふ。廉氏聚珍の内容は、古書古畫を始め、銅器磁器玉類等各般の器玩に互り、古畫のみにも一千五百六十點の多數にして、唐宋以來の名蹟は、概ね備はらざるなく、殊に明清諸家に至りては、悉く蒐羅して漏すなしと、而してこの大聚集の一半は、廉氏祖先以來累代積聚したるものにして、他の一半は明末の豪族宮紫玄、及び其子孫相傳へて聚珍に意を用ひ、宮子行宮玉甫兄弟に至りて、前後四十五年間數十萬金を費し、支那十五省を歴遊して廣く搜求し、扇面のみにても千有餘面を得たるものなりといふ。

〔中略。端方著「廉氏小萬柳堂藏畫記」〕

北京駐劄の山座公使、廉氏收藏の豊富なるを聞き、廉君を憐憑して帶同來朝せしめたるを以て、本校に於ては展覽會を開き、本邦藝術界の研究資料に供することとし、廉氏所携の珍什を悉く文庫に於て保管し、文庫閱覽室及び陳列室を會場に充て、左の趣意書を添へて普く朝野藝能の士を、招待したるが、兩日の來觀者凡そ一千五百名の多數に上り、松方侯、徳川（義親）侯、土方伯、平田子、秋元子、末松子、花房子、後藤男、高橋男、牧野男、九鬼男、都築男、近藤男、細川潤次郎男、股野博物館長、矢野龍溪、鎌田慶應義塾長、小牧昌業、下條正雄、田中文學博士、犬養毅、前田文學博士、山本前農相、市村博士、箕作博士等社會各方面の